

(1) 研究課題名 医療通訳拠点病院における通訳の現状と課題 —医療通訳育成カリキュラム基準を通して

看護学科 川内規会

1. 研究の背景

2014年に医療機関における外国人患者受け入れ環境整備事業における「医療通訳拠点病院」が公募され、19医療機関が選定された。また「医療通訳育成カリキュラム基準」が厚生労働省から示され、医療通訳養成の現状も大きく変化してきた。

2. 目的

「医療通訳拠点病院」の通訳事情を知ることから、言語的サポートのあり方を明らかにするとともに、「医療通訳育成カリキュラム基準」を通して、通訳養成の現状と課題を再考することが目的である。

3. 研究方法

「医療通訳拠点病院」の言語的サポート状況を報告書のデータから読み取り、外国人患者に対する「受付・検査・診療・会計」の各場面における言語対応状況を分析し、通訳環境と言語の問題を示す。また、「医療通訳育成カリキュラム基準」を整理し、通訳サポートシステムがない地域の養成研修について再考する。

4. 研究活動内容とその成果

医療通訳拠点病院を対象にした調査結果では、外国人患者に対して、「受付・検査・診療・会計」の各場面における言語対応状況のデータを収集したものが報告されている(2015)。外国人患者への言語対応に関しては、即時対応の必要性が挙げられた。4割強が予約外での診療であったうえに、診療時間外に受診する外国人患者の割合が15%に及んでいる。ここではタイムラグが生じる外部通訳派遣では対応が難しいため、院内スタッフによる対応や、遠隔通訳等を利用した対応の確立も考える必要があると分析されている。

「受付・会計・診療」では通訳無しで現場の職員が直接言語対応する割合が比較的高かった。これは「受付・会計時」には、事務職員による会話集や翻訳アプリを利用する一次的対応が多く、また、「診療時」には英語力のある医師による直接的な対応が多いことを反映しているものと推察されている。一方「検査時」には、簡単な一次対応以上の内容が必要であるため、検査内容・方法の説明等で、通訳利用の割合が比較的高くなっているものと分析されている。

医療通訳者には、専門的な養成研修を受けた知識と技術の確保が期待される。2014年に厚生労働省は「医療通訳育成カリキュラム基準」が示したが、そこには医療通訳に必要な知識、能力とスキル、倫理、対応力を身につけるための研修として、「医療通訳研修Ⅰ」「医療通訳研修Ⅱ」「実習」の3部構成で人数、時間数、内容の詳細が出された。具体的には1クラス90分とし、研修時間は50クラス(75時間)以上とした。通訳実技は最低8クラス(12時間)以上、実習は、25クラス(37.5時間)以上とし、その内病院での実習は20クラス(30時間)程度を義務づけている。それぞれの理解度、習得度を測るために口頭、あるいは筆記、模擬通訳を通じて評価し、実施機関を通じて修了書を発行するという形を示している。

通訳派遣システムのある医療現場(拠点病院)では、言語の壁が医療に問題をきたすと考えられる状況・対策が見つけやすい上に、「医療通訳育成カリキュラム基準」に沿った研修を行うことが可能である。しかし問題視していない地域の医療者は、外国人患者の診療やコミュニケーション行為のどのタイミングで医療に問題をきたすのかを想像することは難しい。

5. 今後の展望

言語対策を先駆的に進めてきている医療現場の現状を知るとは、外国人患者対応の未経験な医療者や職員、ボランティア通訳者にも、研修の機会が必要であることを伝える貴重な情報になると考える。そのため現状を調査し、課題を示すことは、外国人患者に対応できる医療環境を整えることの意義と、情報保障に取り組む姿勢を養うことにつながるものと考えられる。今後は本研究をさらに深め、地域性が比較できる調査にも取り組んでいきたい。